

# 大君の自死願望をめぐつて——浮舟との比較をとおして——

落谷 雄輝

## 一 はじめに

宇治の姫君の一人、大君の死について考えたい。大君は総角巻の終盤、惜しまれながら「もの枯れゆくやうにて」(総角⑤三二八頁)この世を去る<sup>(1)</sup>。注意したいのは、死に至るまでの間に幾度となく大君の自死願望が語られることである。大君が自死願望を抱くことについてはこれまで、宮家の尊厳を傷つけられたためだとする説<sup>(2)</sup>と、薫との愛を永続化させるためだという説<sup>(3)</sup>とに分けて論じられてきた。あるいは、どちらの要因もあるとして論じるものもある<sup>(4)</sup>。こうした議論に導かれつつ、大君の自死願望について考察することが本稿の目的である。

『源氏物語』以前の作品では、作中人物の自死がしばしば描かれている<sup>(5)</sup>。『大和物語』を例に挙げると、一四七段(生田川伝説)、百五十段(采女伝説)、一五五段(安積山伝説)では、いずれも苦悩

や絶望の末、自死に至った女性が描かれている。

『源氏物語』においては、自らの死を望んでいるように語られる人物は存在するものの、縊首や入水などの自死行為によって作中人物が死亡する様子が明確に描かれることはない。だが、自死願望を抱き、実際に自ら死に向かっていくような行動をとる人物は存在する。それは本稿で取り上げる大君と、彼女の死後に登場する浮舟である。大君は拒食、浮舟は入水という、自らを死に至らしめる行動をそれぞれとっている。大君の死は、拒食が主たる要因とは言いつても、浮舟は入水によって死ぬことを辛うじて免れているため、これらの行為は結果としては自死には直接結びつかない。だが、『源氏物語』において、実際に自死に向けた行動を起こす人物が大君と浮舟の二人しかいないということを考えると、両者の自死に対する向き合い方について着目することには一定の意義があるように考えられる。

大君と同じく自死行為を働く浮舟は、ただひたむきに死を志向し

ている。だが大君については、浮舟のように真摯に自らの死と向き合っているようには見えないのである。そこには、何か別の思惑、欲望が隠れているのだと考えられる。そこで本稿では、適宜浮舟と対比しながら、大君の自死願望の裏にある欲望について明らかにしてみたい。

## 二 大君の自死願望

まずは、大君の自死願望が描出される箇所を概観したい。最も早く大君の自死願望が描かれるのは、次の場面である。

A しばしにても、後れたてまつりて、世にあるべきものと思しな  
らはぬ御心地どもにて、いかでかは後れじと泣き沈みたまへど、  
限りある道なりければ、何のかひなし。 (権本⑤一八九頁)

山籠っていた八の宮が薨去した直後の描写である。八の宮が亡くなったことを聞き、後追いしたいと泣き沈む様子が描かれている。なお、この描写については中の君も主語に含まれているため、大君特有の自死願望としては扱わない。

次に挙げるのは、大君の長い心内文の一部である。

B ……なほ我だに、さるもの思ひに沈まず、罪などいと深からぬ  
さきに、いかで亡くなりなむ、と思し沈むに……

(総角⑤三〇〇頁)

宇治での紅葉狩りのあと、匂宮が中の君のもとに立ち寄り帰京し

たことで、大君はひどく落胆する。この出来事を受けて、自分も薫から同じような扱いを受けるかもしれないと思った大君は結婚拒否の念を募らせ、自死願望を抱く。

C 「限りあれば、片時もとまらじと思ひしかど、ながらふるわざ  
なりけりと思ひはべるぞや。明日知らぬ世の、さすがに嘆かし  
きも、誰がため惜しき命にかは」 (総角⑤三二三頁)

右は、中の君に対する大君の発言である。匂宮からの文に返事をしようとしないうちの君に対して、自分は片時もこの世にとどまろうとは思わないが、あなたのことを思うと命が惜しいのだと言って、彼女に返事を書くよう説得をする。

最後に挙げるのは、大君の心内語の一部である。  
D みづからも、たひらかにあらむとも仏をも念じたまはばこそあ  
らめ、なほかかるといかにいかで亡せなむ、この君のかくそひ  
あて、残りなくなりぬるを、今はもて離れむ方なし……

(総角⑤三三三頁)

病状が悪化した大君は、薫の手配による修法や祈念を受ける。だが、大君本人は、回復を願うどころか、逆にこの機会に死んでしまいたいと願う。

以上、大君の自死願望が描かれる箇所を取り上げた。それぞれ「いかで」や「片時も」という言葉が使われていることから、いずれの自死願望も極めて強いものであることがうかがえる。このほかにも自死願望を想起させるような発言や場面があるが、それらについて

は分析のなかで適宜取り上げていくこととする。

### 三 ほかの作中人物の自死願望について

『源氏物語』作中には、ほかにも自死を望む心境が描かれる人物が存在する。自死願望が表出する例で最も多いのは、自分にとって大切な人に先立たれ、自らも後を追いたいと願う場面である。前掲の本文Aもこの例にあたる。ほかの例もいくつか見てみよう。

夕顔巻にて、夕顔が亡くなったあとの右近の様子は、「我も後れじとまどひはべりて、今朝は谷に落ち入りぬとなん見たまへつる。」(夕顔①一七六頁)と惟光が語っている。また、一条御息所が亡くなった際の落葉の宮の様子は、「宮は後れじと思し入りて、つと添ひ臥したまへり。」(夕霧④四三八頁)というものであった。さらに大君が亡くなったことを受けて、中の君が「後れじと思ひまどひたまへるさま」(総角⑤三二八頁)を見せるほか、薫は「半なる偈教へむ鬼もがな、ことつけて身も投げむ」(総角⑤三三三頁)という心中が語られる<sup>6)</sup>。弁も、亡くなる前ではあるが、大君が亡くなりそうな様子であることを受けて、「まづいかで先立ちきこえなむ」(総角⑤三一六頁)と述べている。

自らの身に降りかかった不幸のために、自死への思いを募らせる例もある。光源氏の通いが途絶えたときの明石の君の心境は、「今ぞまことに身も投げつべき心地」(明石②二六〇頁)と語られる。

また女三の宮は、柏木との不義密通の子である薫を産んだことの呵責から「さはれ、このついでにも死なばや」(柏木④三〇〇頁)と思っている。

意中の相手に対する恨み言の一環として自死を仄めかす発言をする人物もいる。柏木は小侍従の手引きで女三の宮に近付いた折、女三の宮からの応答がなかったことを受けて、「さらば不用なめり。身をいたづらにやはなしはてぬ。いと棄てがたきによりてこそ、かくまでもはべれ、今宵に限りはべりなむいみじくなむ。つゆにても御心ゆるしたまふさまならば、それにかへつるにても棄てはべりなまし」(若菜下④二二七頁)と、自死願望を繰り返して表明しながら女三の宮に恨み言を述べる。また薫は、大君に部屋から脱出されて逢瀬を遂げられなかった際、弁に対して「今宵なむまことに恥づかしく、身も投げつべき心地する」(総角⑤二五六頁)と恨み言を述べる。

いま見てきた人物については、いずれも具体的に自死に向けた行動を起こすことはない。身投げしたいという思いを抱いても、実際に身投げをすることはないのである。程度の差はあるものの、あくまで「死んでしまいたいほど辛い」という心情に伴って自死願望を表出しているにすぎない。

それに対して、実際に自死に向けた行動を起こすのが浮舟である。「まろは、いかで死なばや」(浮舟⑥一八一頁)、「わが身ひとつの亡くなりなんのみこそめやすからめ」(浮舟⑥一八四頁)、「ながら

へばかならずうきこと見えぬべき身の、亡くならんは何か惜しかるべき」(浮舟⑥一八四〜一八五頁)と幾度となくその自死願望は語られ、死を決意した浮舟は匂宮への手紙などを「灯台の火に焼き、水に投げ入れさせ」(浮舟⑥一八五頁)て念入りに処分する。そして「なげきわび身をは棄つとも亡き影にうき名流さむことをこそ思へ」(浮舟⑥一九三頁)という歌を詠み、宇治川を眺めながら「羊の歩みよりもほどなき心地」(浮舟⑥一九三頁)を抱き、行方を眩ます。着々と自死への思いを強めていき、結果的に入水に至ったことが想像される。横川僧都一行に救出されることで浮舟は辛うじて生き返るが、そのあとも浮舟の自死願望が消えることはない。

入水という鮮烈な行為ではないものの、大君も自死に向けた行動を起こしている。それは拒食である。生きていくために必要な食事の摂取をあえて行わず、次第に憔悴していく様は、まさに自らの意思で死に近づく行動をとる姿にほかならない。大君は身投げすることはないにせよ、自死に向けた具体的な行動を起こしているのである。

#### 四 拒食について

大君が食事を口にしない様子は、作中で何度か語られる。本文Bの自死願望が語られたあとは、大君が自らの死を実現するべく食べ拒否している様子が語られていた。その部分を含めて本文を再掲する。

……なほ我だに、さるもの思ひに沈まず、罪などいと深からぬさきに、いかで亡くなりなむ、と思し沈むに、心地もまことに苦しければ、物もつゆばかりまゐらず、ただ亡からむ後のあらましごとを、明け暮れ思ひつづけたまふに……

(総角⑤三〇〇頁)

このとき大君が「つゆばかり」も食べ物を口にしないのは何故か。自身の体調不良(「心地もまことに苦しければ」)も、拒食の理由の一つであることには違いないが、一方で「いかで亡くなりなむ」という心内語がわざわざ語られ、自分が亡くなったあとのことばかり考えていることを踏まえると、このときの拒食が自死願望に由来しているものだと言うことができるだろう。

さらに弁も大君の拒食について薫に語っていた。

「そこはかと痛きところもなく、おどろおどろしからぬ御なやみに、物をなむさらに聞こしめさぬ。もとより、人に似たまはずあえかにおはします中に、この宮の御事出で来にし後、いとどもの思したるさまにて、はかなき御くだものだに御覧じ入れざりしつもりや、あさましく弱くなりたまひて、さらに頼むべくも見えたまはず。世に心憂くはべりける身の命の長さにて、かかることを見たてまつれば、まづいかで先立ちきこえなむと思ひたまへ入りはべり」(総角⑤三二五〜三二六頁)

弁によると、大君は特に痛いところもなく大袈裟な病状でないにもかかわらず食事をまったく口にせず、その結果、衰弱していったと

いう。体力や気力がないから食事を口にしないのではなく、拒食のせいで弱っていくという過程から、この拒食が大君の自死への思いを発端に行われたものであることが十分推察される<sup>9)</sup>。

食事(薬湯なども含める)をとらないという行為については、『源氏物語』作中でほかにも描かれている。だが、そのほとんどが自死を達成することを目的として行われるものではない。たとえば桐壺更衣を亡くした桐壺帝の様子は、「ものなどもきこしめさず、朝餉のけしきばかりふれさせたまひて、大床子の御膳などは、いとほるかに思しめしたれば」(桐壺①三六頁)と語られている。また幼少期の紫の上が祖母である尼君を亡くしたときの様子は少納言に「夜昼恋ひきこえたまふに、はかなきものも聞こしめさず」(若紫①二四八頁)と語られている。そのほか、夕霧、落葉の宮、女三の宮、中の君、匂宮などが食事をとらない様子が描かれるが、いずれも精神状態や体調によって食事が喉を通らなくなった様子が描かれている場面である。少なくとも彼らは自らの死を望む意思で拒食をしているという類いのものではない<sup>10)</sup>。

一方で、大君と同様、自死を動機とした拒食行為を行うのが浮舟である。浮舟も大君と同様、幾度となく食事や薬湯を口にしない様子が語られるが、ここでは次の場面に注目したい。

いかにうきさまを、知らぬ人にあつかはれ見えつらん、と恥づかしう、つひにかくて生きかへりぬるかと思ふも口惜しければ、いみじうおぼえて、なかなか、沈みたまへりつる日ごろは、う

つし心もなきさまにて、ものいささかまぬるをりもありつるを、つゆばかりの湯をだにまゐらず。  
(手習⑥二九七頁)

横川僧都一行に発見され、小野へ連れてこられた浮舟は、僧都の加持により意識を取り戻す。浮舟は、情けない姿を見ず知らずの人々に晒したことを恥じつつ、自分が生き返ってしまったことを残念に思う。そして用意された薬湯を少しも飲もうとしない様子が描かれる。

このとき浮舟が薬湯を口にしないのは、飲むことができないからではない。意識が回復する前には「ものいささか」飲んでいたのであるから、意識が戻った今になって、急に喉を通らなくなったというのではないはずである。浮舟は、生き返ってしまったことを残念に思い、再び死の世界へと足を向けるべく、自らの意志で薬湯を拒むのである。この場面の少しあとには、「なほいかで死なん」(手習⑥二九八頁)という心中が語られているところからも、薬湯の拒否が彼女の自死願望に直結していることは明らかである。

自死願望に由来した拒食を行う意味で、大君と浮舟は共通する。だが、その自死願望の性質には、両者間に落差があるように考えられる。

## 五 病状の指摘について

前節で引用した、大君の拒食に関する弁の発言で気になるところ

がある。それは、弁によって拒食前の大君の病状が「そこはかと痛きところもなく、おどろおどろしからぬ」ものであったことがわざわざ語られるという点である。

拒食に関する記述以外にも、大君の病状が大したものではないことがことさらに強調される場面がある。それは次に引用する場面である。

中納言おはしたり。なやましげにしたまふと聞きて、御とぶらひなりけり。いと心地まどふばかりの御なやみにもあらねど、ことつけて、対面したまはず。「おどろきながら、遙けきほどを参り来つるを。なほかのなやみたまふらむ御あたり近く」と、切におほつかながりきこえたまへば、うちとけて住まひたまへる方の御簾の前に入れたてまつる。(総角⑤三〇六頁)

大君が病に臥していることを聞いた薫は大君のもとを訪れるが、大君は病を口実にして薫と対面しようとしな<sup>い</sup>。薫はそれでも対面を懇願し、結局御簾の前まで入れてもらう。このとき大君は自らの病を対面拒否のための口実に用いているが、その病がそれほどひどい状態ではないことが、語り手によってわざわざ語られる。このことについて、かつて次のようなことを述べたことがある。

この場面では、病を口実にしたにもかかわらず、その病がそれほど悪いものではないという実情がほめかされる。設けた口実に実情が伴っていないければ、それだけ相手は異議を唱える余地を得ることとなるのであり、それだけ対面拒否という目的を果たしづらくな

る。それでも脆弱な口実を用いたのは、大君が逆に薫と対面してしまふかもしれない状況に仕立て上げるためだったのだと考えられる。というのも、拒否の姿勢を見せることで、薫が食い下がって自分との対面を必死に求めることを期待したのである。あえて脆弱な口実を用いたのも、自身の対面拒否に対して薫が必死に抵抗をするための隙を与えているのであった。この場面からは薫が自分を求めていることを確認し、自分は大切に思われているのだという実感を得たいという大君の欲望が読み取れる。大君は病気を口実に薫との対面を拒否するという行為そのものを、薫の愛情の確認と、それによる自己満足の獲得のために利用していたのだ、と。<sup>12</sup>

いま見た対面拒否の場面と同様、病状がさほど悪くないことがことさらに語られる点に注目すると、大君の拒食も対面拒否のときと同じく、周囲の人間の心配を引き出すために行われた側面があったのではないかと考えられる。もちろん、大君の自死願望それ自体が、周囲の関心を引くための嘘であつたわけではなく、死にたいという気持ち自体は本心であつただろう。だが、一方で大君の自死願望には、さほど切迫感がないのである。いくつか場面を検証したい。

## 六 切迫感のない自死願望

まずは、本文Cの自死願望について見てみたい。本文Cに至るまでの中の君とのやりとりと併せて改めて引用する。

「なほ心うつくしうおいらかなるさまに聞こえたまへ。かくてはかなくもなりはべりなば、これよりなごりなき方に、もてなしきこゆる人もや出で来むとうしろめたきを。まれにもこの人の思ひ出でしこえたまはむに、さやうなるあるまじき心つかふ人はえあらじと思へば、つらきながらなむ頼まれはべる」と聞こえたまへば、「後らさむと思しけるこそ、いみじくはべれ」と、いよいよ顔をひき入れたまふ。「限りあれば、片時もとまらじと思ひしかど、ながらふるわざなりけりと思ひはべるぞや。明日知らぬ世の、さすがに嘆かしきも、誰がため惜しき命にかは」

(総角⑤三二二～三二三頁)

匂宮への文の返事に踏み切れない中の君に対して大君は、自分が亡くなったあとのことを思うとあなたのが心配であるとして、匂宮への返事を薦める。中の君は、死を匂わせる言葉を聞いて、自分を置いて亡くなるうとするなど恨めしいと顔をうずめる。それに対して、大君は、片時もこの世に生きてはいたくない、という言葉を使いつつも、中の君のためを思うと自分の命が惜しいというふうに述べている。自死を匂わず言葉を並べてはいるものの、中の君が心配で命が惜しいという文脈に落ち着いている。死をひたむきに見つめているというよりかは、中の君に対する心配を理由に死にたいけど死ねない、という結論に落としこんでいるように見える<sup>13)</sup>。

また、大君は亡くなる直前、薫に次のように述べている。

「よろしきひまあらば、聞こえまほしきこともはべれど、ただ

消え入るやうにのみなりゆくは、口惜しきわざにこそ」

(総角⑤三二五～三二六頁)

今はもうただ命絶えるだけになってしまい、話したいことも話せなくなつてしまつて残念である、という発言である。もちろんここで残念だと言っているのは、薫に伝えたかった言葉が伝えられないことではあるが、何にせよ現世への執着を感じさせる。さらに、大君は次のような発言もしている。

「かくはかなかりけるものを、思ひ隈なきやうに思されたりつるもかひなければ、このとまりたまはむ人を、同じことと思ひきこえたまへとほのめかしきこえしに、違へたまはざらましかば、うしろやすからましと、これのみなむ恨めしきふしにてとまりぬべうおほえはべる」

(総角⑤三二七頁)

残される中の君を大切にしたいという願いを薫が受けてくれたいたら自分は安心して亡くなることができたが、そうではなかったのでこの世に執着が残りそうだと述べるのである。大君は今際の際になつてみて、二度にもわたつて現世への執着を吐露するのである。いま見てきた場面を踏まえると、やはり死ぬことだけに思いを馳せているというよりは、自分が亡くなるうとする姿を見て悲しんだり抗おうとしたりする周囲の人間を見て、自分が生きている意味を見出しているように見える。こうした態度は、かろうじて生き延びてもなお、死を切実に願う浮舟とは対照的である。

## 七 出家願望——浮舟との対比から

さらに、大君に関して切迫感がないのは自死だけでなく、俗世との断絶を意味する出家についても同様である。やや長文となるが、本文Dで挙げた本文をその先も含めて再度引用する。

みづからも、たひらかにあらむとも仏をも念じたまはばこそあらめ、なほかかるついでにいかで亡せなむ、この君のかくそひゐて、残りなくなりぬるを、今はもて離れむ方なし、さりとて、かうおろかならず見ゆる心ばへの、見劣りして我も人も見えむが、心やすからずうかるべきこと、もし命強ひてとまらば、病にことつけて、かたちをも変へてむ、さてのみこそ、長き心をもかたみに見はつべきわざなれ、と思ひしみたまひて、とあるにてもかかるにても、いかでこの思ふこととしてむと思すを、さまでさかしきことはえうち出でたまはで、中の宮に、「心地のいよいよ頼もしげなくおほゆるを、忌むことなん、いと験ありて命延ぶること聞きしを、さやうに阿闍梨にのたまへ」と聞こえたまへば、みな泣き騒ぎて、「いとあるまじき御事なり。かくばかり思しまどふめる中納言殿も、いかがあへなきやうに思ひきこえたまはむ」と、似げなきことに思ひて、頼もし人にも申しつがねば、口惜しう思す。(総角⑤三三三―三三四頁)

大君は、自らの死を願う一方、もし生き長らえてしまうくらいなら、

病を口実にいつそ出家してしまおうかと考える。大君は中の君を通して阿闍梨に出家を願い出ようとするが、聞きつけた女房たちが泣き騒ぎ、結局取り次がれることなく終わる。

まず注意したいのは、自死を望んでいる大君が、命が長らえてしまったらどうするか、ということを考えていることである。生き延びたことを具体的に想定している姿からは、自死願望の切迫さを感じられない。また、「もし命強ひてとまらば、病にことつけて、かたちをも変へてむ」とあるように、出家は死のうにもどうしても死ねずに生きながらえてしまったときのための最終手段であるはずなのに、いち早くそのカードを切っている。さらに、大君は出家を願い出るときに、「いと験ありて命延ぶること聞きしを」と述べる。もちろんこの発言は出家を実現させるための口実に過ぎないわけだが、「いかで亡せなむ」と考えている大君が、口実とはいえ、生きながらえるための手段として出家を選択したと発言していることには注意が必要だろう。こうした態度からは、死に向かう気概が見えない。

そしてその出家の願い出にも深刻さががない。この場面について以前、次のようなことを論じた。

出家を願い出る際、中の君に阿闍梨の取り継ぎを頼めば、周囲がなんとしても阻止しようとしてくるであろうことは大君でも容易に想像できたであろう。どうしても出家を遂げなければ、中の君も含め、出家に反対しそうな周囲の人間に気づかれないよう細心の注意

を払いそうなものだが、大君はあえて中の君に取り継ぎを頼むのである。こうした行動からは、出家を止めてもらうための隙をあえて作ろうという企みが垣間見える。そこから考えうるに、出家をすること自体は病という口実を設けることで達成したい目的ではなく、むしろ出家を止めてもらうこと自体が目的だったのではないか。薫に対する対面拒否のときと同様、大君は周囲の人間、具体的には女房や薫から出家を止めてもらい、自分が大切に思われていることを確認することが、真の欲望だったのである。大君の出家を女房や薫が阻むことは、女房や薫が自分に執着していることを意味する。大君は病を口実に出家願望を仄めかすことで、周囲の人間の気持ちを確認かめ、自分自身が俗世に残ってほしいと強く望まれる存在であることを実感したいという欲望を満たしているのである、と。

自死願望もこの出家願望と同様に、死そのものへの欲望に駆り立てられて生じているとは捉えがたい。周囲の人間からの愛情を確かめるという欲望をきっかけにして、大君の自死願望あるいは出家願望は生まれているのである。言ってみれば、大君にとって自死や出家は、それ自体が目的のではなく、周囲の愛情を確かめるための手段でしかない。

同じく出家願望をもち、実際に出家を遂げた浮舟と比較してみると、その性質の違いは明らかである。

恥づかしうとも、あひて、尼になしたまひてよと言はん、さかしら人すくなくてよきをりにこそと思へば、起きて、「心地の

いとあしうのみはべるを、僧都の下りさせたまへらんに、思むこと受けはべらんとなむ思ひはべるを、さやうに聞こえたまへ」と語らひたまへば、ほけほけしうなづく。(手習⑥三三三頁)

出家願望を申し出るにあたって、病氣平癒を口実にする点は大君と同様だが、浮舟は出家を阻止しようとするであろう妹尼が不在のときを見計らって、毫碌した母尼に取り継ぎを頼むのである。大君とは対照的に、なんとかして出家を成し遂げようとする信念が浮舟にはある。浮舟にはまず強い死への志向があり、それでも生きながらえてしまったがために、今度はなんとか出家してみせたのである。奇しくも「命強ひてとま」ったときに「病にことつけて、かたちをも変へ」という行動は、大君ではなく浮舟によって実現されたのであった。

#### 八 おわりに

ここまで大君の自死願望について、拒食行為を手がかりに考察を行った。自死願望を抱き、実際に自死に向かう行動に出る人物は、『源氏物語』作中では、大君と浮舟しかいない。だが、両者の死への向き合い方は対照的である。大君は拒食することで自らの死期を早めていったが、これはひたむきな自死願望によるものではなかった。自らの心中にとどめるのではなく、実際に拒食という形でその自死願望をことさらに他者に示すことで、周囲の心配や同情を引き出

す目的があったのだと考えられる。そのことが最も顕著に表れるのは、次に挙げる薫とのやりとりの場面である。

いと見苦しく、ことさらにもいとはしき身をと聞きたまへど、  
思ひ隈なくのたまはむもうたてあれば、さすがに、ながらへよ  
と思ひたまへる心ばへも、あはれなり。

(総角⑤三〇七―三〇八頁)

病床の大君を見舞った薫が、病気の回復のための修法の手配をする  
ことを受けて、「ことさらにもいとはしき身を」と自死願望を表出  
させる一方で、薫が自分に延命してほしいと思ってくれる気持ちを  
「あはれ」に思っている。本気で死を望んでいたのであれば、薫の  
懸命な延命措置も煩わしく感じるはずだが、大君はむしろ愉悦を覚  
える。この場面には、死を望んでいるにもかかわらず、自分に対す  
る薫の深い執着心によって欲望を満たす大君の姿が看取される。千  
原美沙子は、「自己愛の充足」が大君の求めたものだと言う<sup>(1)</sup>。まさ  
しく大君が望んでいたのは、自分は薫に愛されている、という確か  
な実感によって自己愛を満たすことであつただろう。一方、千原は、  
「心象の中で永續性を保たせたいというのが、大君の願ひであつた」  
「薫によって深々と追憶される時に、大君のナルシズムは完成す  
る」と述べるが、自死願望の裏に潜んだ大君の欲望に限って言えば、  
もっと刹那的なものだったのではないだろうか。自らの死の淵にお  
いても、自分を見限らず心の底から「ながらへよ」と懇願する薫の  
姿を見て、一瞬だけでも薫の愛情を確信できた時点で、彼女の欲望

はずで満たされたことだろう。

浮舟は、ひたむきに自らの死を強く願うも、それを達成できず、  
確実な方法で出家をするものの、出家してもなお俗世の煩雑さから  
解放されることがなかった。一方、薫を筆頭とした周囲の人間の関  
心を引くために、自死願望や出家願望を露呈させ、結果として惜し  
まれながらこの世を去った大君は、周囲の愛を一心に受けて亡く  
なったことで、自らの欲望を満たすことに成功したといえるだろう。

#### 注

- (1) 湯本なぎさ「ものの枯れゆくやうに」(『源氏物語』の心象  
ノート)(王朝物語研究会編『論集源氏物語とその前後4』新  
典社 一九九三年)、鈴木早苗「枯れゆく」宇治の大君―『源  
氏物語』総角巻の求婚拒否と『白氏文集』「婦人苦」―(『文  
学・語学』一九六号 二〇一〇年三月)、咲本英恵「宇治十帖」  
大君考―その死を視点に(『文学藝術』三四号 二〇一二年二  
月)、同「源氏物語」宇治大君の死の表現―「もののかれゆく  
やうにて」を中心として―(『表現研究』九十五号 二〇一二  
年)、三村友希「死と再生の『源氏物語』宇治十帖」枯れ急ぐ  
大君と朽木願望の浮舟―(『日本文学』六六卷九号 二〇一七  
年九月)などは、「ものの枯れゆく」という表現に着目して大  
君の死について論じる。

- (2) 日向一雅「宇治の大君―独身に徹し切った精神の品位」(『国  
文学 解釈と鑑賞』六九卷八号 二〇〇四年八月)など。

- (3) 石田穰二「大い君の死について」〔源氏物語論集〕桜楓社  
一九七一年。初出一九六八年) など。
- (4) 千原美沙子「大君・中君」〔源氏物語講座 四〕有精堂 一  
九七一年)や茅場康雄「宇治の大君——その生の軌跡——」〔学  
苑〕五二九号 一九八四年一月) など。
- (5) 尾崎暢殃「古代文学と自殺」〔国文学 解釈と鑑賞〕三五卷  
八号 一九七〇年七月) は、上代作品に描かれる自殺について  
詳細に取り上げながら分析する。また小嶋菜温子「妊婦の自  
殺譚」と「産む性」〔源氏物語の性と生誕〕立教大学出版会  
二〇〇四年)、同「安積山の女」の変容——妊婦の自殺譚”  
の系譜から」〔院政期文化論集第五卷 生活誌〕森話社 二〇  
〇五年) は、『大和物語』の「安積山の女」や、狭衣物語の飛  
鳥井の姫君をめぐる系譜を、「妊婦の自殺譚」と名づけて論じ  
る。これらの論を踏まえつつ、近年では湯淺幸代「妊婦の自死  
——平安期の物語を中心に——」〔物語研究〕二三号 二〇二三年  
三月) が平安時代の妊婦の自死について俯瞰しながら論じてい  
る。
- (6) このときの薫の自死願望に深刻さがなかったことについては、拙  
稿「宇治十帖の「ことづく」をめぐる——口実に秘められた  
欲望」〔日本文学〕七一巻一二号 二〇二二年二月) にて論  
じた。
- (7) 『日本国語大辞典 第二版』によれば、「羊の歩み」は「屠所  
にひかれてゆく羊のような、力ない歩み。刻々、死に近づくと  
このたとえ」を表す。
- (8) 大君の拒食が語られる場面は、本稿で取り上げる箇所のほか  
に、「夜もすがら人をそそのかして、御湯などまもらせてたま  
つりたまへど、つゆばかりまゐる気色もなし」(総角⑤三一  
九頁)と、「はかなき御くだものをも聞こしめしふれず、ただ弱  
りになむ弱らせたまふめりし」(総角⑤三三四頁)がある。
- (9) 神田龍身「薫と大君——不能的愛の快樂」〔源氏物語Ⅱ性の  
迷宮へ〕講談社 二〇〇一年)は「大君の死は一種の断食によ  
るものであり、自殺以外のなものでもない」と述べる。ま  
た、斎藤由紀子も「大君の不食の病には死を決意した大君の強  
い意志が働いている」(鈴木一雄監修、後藤祥子・大軒史子編  
『源氏物語の鑑賞と基礎知識 総角』至文堂 二〇〇三年一  
月 鑑賞欄「食わずの病い」と述べる。
- (10) 女三の宮については、「宮は、さばかりひはづなる御さまに  
て、いとむくつけう、ならはぬことの恐ろしう思されけるに、  
御湯なども聞こしめさず、身の心憂きことをかかるとつけても  
思し入れば、さはれ、このついでにも死なばやと思す。」(柏木  
④三〇〇頁)と、拒食と自死願望が同時に語られている場面が  
ある。だが、ここでは自死願望によって薬湯を飲むことを拒否  
しているわけではない。彼女が薬湯を飲まないのは、初産(な  
らはぬこと)を終えた恐ろしさが原因であり、あとから「つ  
いでに」自死願望が生じているだけである。
- (11) 入水以前にも、「日ごろあやしくのみなむ。はかなき物もき  
こしめさず、なやましげにせさせたまふ」(浮舟⑥一六四頁)  
や、「物きこしめさぬ、いとあやし。御湯漬」(浮舟⑥一九六頁)  
などの乳母の発言がある。
- (12) 注6に挙げた拙稿。
- (13) 「誰がため惜しき命にかは」という部分には、「岩くぐる山井  
の水を掬びあげて誰がため惜しき命とか知る」(伊勢集・四二

四番）が踏まえられていることが『源氏積』以降、多くの注釈書で指摘されている。詞書がないため、この歌が詠まれた背景は不明であるが、少なくとも、誰かのために命を惜しんでいる、という歌意であることにはまず間違いない。この歌を引歌に用いているところからも、このときの大君の発言が、死よりもむしろ生に対して眼差しが向けられていることを印象づける。

(14) 注6に挙げた拙稿。

(15) 注4で挙げた千原論文。

※ 『源氏物語』の引用は、『新編日本古典文学全集』（小学館）に  
拠り、末尾に巻名、巻数、頁数を付した。

（ふきやゆうき 本学日本学研究所研究員、開志専門職大学助手）